

市井のイエス、スクリーンに生まれ—三島有紀子『幼な子われらに生まれ』

I 始まりと終わり

『幼な子われらに生まれ』というタイトルをご覧になって、みなさんは何を連想なさいますか？ おそらく、イエス・キリストの誕生でしょう。クリスマスからおよそ一ヶ月が経過した今日、イエス・キリストの生誕をタイトルに冠した映画をご紹介します。

昨年8月ロードショーのこの映画は、1996年に作家の重松清が発表した、同名の小説をもとにしています。重松清は文庫版の解説で、タイトルは、イエス生誕の喜びを歌った「グレゴリオ聖歌」から来ている、と述べています。

では、映画では、いったい誰が「幼な子」なのでしょう。冒頭のシーンから見ていきましょう。映画は、何者かの〈足元〉を映し出すことから始まります。何者かは靴ひもを結び、歩き出します。顔が映し出されることで、浅野忠信が演じる「田中信」であることがわかります。靴ひもを結んで田中信が歩き出すショットは、「幼な子」がこの世における第一歩を踏み出す行為のメタファーとなっています。127分後、映画は、田中信の〈顔〉を大写しにしたまま、カメラが静止して終わります。動きが止まることで、田中信はスクリーン上で〈死〉ぬのです。主人公は、文字通り〈頭のてっぺん〉から〈つま先〉まで映される、田中信です。映画は、田中信のスクリーンへの出現と消滅を、「幼な子」の〈誕生〉と〈死〉と重ねて描いているといえます。

II 市井のイエス

「幼な子」がもともとイエスをさすことに見合うように、田中信はイエスのごとき人物として描かれています。二度目の妻となる奈苗—田中麗奈が演じています—にプロポーズするとき、信は奈苗の連れ子の薫を背負いながら、坂道の階段を登ってきます。「薫」はすでに7歳で、20キロ前後はあったことでしょう。「薫」という漢字の中には、「重い」という字が入っています。薫はその名の通り、信が背負うには〈重〉かったはずですが、薫を背負って階段を登る信は、十字架を背負ってゴルゴタの丘を登るイエスと図像的に一致しています。

薫は、実の父・沢田から受けた暴力が原因で、男性に恐怖心を抱くようになっていました。そんな薫が、公園で信にブランコを押してもらって遊ぶことで、久しぶりに笑顔を見せます。

「信」は、「田中」の「苗」のごとく、経済的に自立していない「奈苗」の経済的負担はもちろんのこと、薫の精神的な負担をも背負うことができる、そう「信」じて、奈苗にプロポーズしたのでしょう。しかし4年後、奈苗が信との子供を妊娠したのをきっかけに、薫は信に対し反抗的な態度をとるようになり、信はそんな彼女に翻弄されます。薫という十字架を自ら進んで背負ったものの、薫が思春期に差し掛かってみると、十字架を背負うことには精神的苦痛を伴うようになるのです。それに追い打ちをかけるように、信は会社から、倉庫への出向を命じられます。私的領域のみならず、公的領域でも精神的苦痛を味わわなければならないのです。しかも出向の原因は、新しい家族と過ごす時間を大切にしたいためなのだから、やりきれません。しかし、「信」は二つの十字架が自分に課されたものであると「信」じ、ときに痲癩を起こしながらも、思うままにならない現実と付き合い続けます。信は、〈市井のイエス〉というべき存在です。

ところで、信の元妻・友佳—寺島しのぶが演じています—の再婚相手である江崎は、背中痛みで病院に行ってみると、末期がんであることわかり、瀕死となります。これは偶然ではありません。信には精神的苦痛という十字架が課される一方、江崎には、肉体的苦痛という十字架が課され、〈死〉に至るのです。

主人公と江崎だけでなく、他の人物の造型もまた、二項対立的です。家族に対する責任を負う男「田中信」と、責任を負わない男「沢田」。経済的・精神的に自立している女「友佳」と、自立していない女「奈苗」。この女性二人の対比は、友佳がショートカットであるのに対し、奈苗は肩までのロングヘアという形で、外見でも表現されています。二項対立的に描かれるのは、大人たちだけではありません。継父であると知らないせいもあり、主人公に無条件の信頼を寄せる次女「恵理子」と、継父であると知っており、主人公に対する不信をあらわにする長女「薫」。主人公に対し、本心をあけっぴ

ろげにする実の娘「沙織」と、本心を隠す「薫」。この女の子二人の対比は、沙織がおでこを出し、髪をアップにしているのに対し、薫はおでこを隠し、髪を下ろすという形で、外見でも表現されています。

ラストシーン。信と奈苗のもとに男の子が生まれます。信がクリスマスセールの商店街を走り抜けて、病院へ急ぐことからわかるように、男の子が誕生するのは、クリスマスの時期です。男の子の誕生は「幼な子」イエスの誕生と重ねられています。新たな「幼な子」の〈誕生〉の直後に、かつての「幼な子」田中信はスクリーン上で静止し、象徴的な〈死〉がもたらされているのです。

田中信の十字架の道行きを描いたといえる本作は、メル・ギブソンが2004年に発表した『パッション』へのオマージュとなっています。どちらも十字架の道行きを描いており、上映時間は127分です。『パッション』は、鞭うたれ、血を流して苦しむイエスを、これでもかといわんばかりに映し出します。二千年前を生きたイエスの〈肉体的苦痛〉を描くことに主眼があります。一方、本作は、現代日本を生きる市井のイエスの〈精神的苦痛〉に焦点をあてます。

本作は、昨年9月、第41回モントリオール世界映画祭で“DEAR ETRANGER”というタイトルで上映されました。英語で、「親愛なる」を意味する“DEAR”と、フランス語で「異邦人」を意味する“ETRANGER”を組み合わせた命名は、英仏二か国語が話されるモントリオールにふさわしいものといえましょう。では、タイトルをこのように変更したのはなぜでしょうか。『幼な子われらに生まれ』を訳しただけだと、主人公がイエス的存在であることが、観客に悟られる可能性があります。カトリック教徒が多いモントリオールで、全人類の救世主であるイエスをあまりに卑小な存在として描いている、という批判が出てもおかしくありません。タイトルの変更も功を奏してか、本作は、2017年9月5日、映画祭で、グランプリに次ぐ、審査員特別賞を受賞しました。快挙を祝したいと思います。

映画は、1月27日から2月2日まで、キネカ大森で上映されます。私も学生の頃、行ったことのある映画館です。今日からちょうど1か月後の2月21日にビデオ化されますので、ツタヤで借りてきて観る、というのもよいかと思います。いずれにせよ、ぜひ一度、ご覧になってみてください。

※この原稿は、「福音と世界」（新教出版社）の2017年2月号に掲載した映画評をもとにしています。